
そして勇者は死んだ～名も無き者達の魔王退治～

田村狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして勇者は死んだ〜名も無き者達の魔王退治〜

【Nコード】

N0109BA

【作者名】

田村狸

【あらすじ】

貧しい少年は成長して勇者となり、魔王を倒して国を救った。そうなるはずだった。しかし勇者一行は辺境の地で土砂崩れに巻き込まれ死体となって発見された。このままでは国が滅ぶ。でも、その前に父が処刑されるだろう。田舎の荘園領主の息子レイディアスは、領地と国と自らを守るため、王国の命運をかけた騒動へと身を投じていく。

王道ファンタジーになり損ねた感がありますが、一応王道を目指し

ます。「深淵の哀悼歌」の本編となる予定です。

プロローグ（前書き）

「深淵の追悼歌」の本編、子供世代編です。まったり更新、の予定。
誤字脱字報告大歓迎です。

ブローグ

やまないな。

レイディアスは執務机に行儀悪く頬づえをつき、窓の外を眺めやうた。視界は重苦しい灰色に塗り固められている。もうじき収穫だというのに昨晩からずっと降り続けている雨が、地面に行く筋もの川を造っていた。

異常気象。これも魔王が現れたせいなのだろうか。今年も飢饉だったら蓄えが危ないかもしれないと胃が痛くなる。

まるで滝つぼにいるかのような激しい雨音がレイディアスの憂鬱を増長させた。屋内にいるのにじっとりと湿った髪がうつむいた顔に降りかかる。

彼の髪は、複雑で珍しい色をしている。何処の遺伝がどう出たのか、よくよく見れば一本一本は銀だったり淡い金や栗色だったりするのだが、全体で見ると、冬の曇天に照らされた落ち葉のような銀桃色に見える。乳母は美しいというが、彼はこの髪が嫌いだった。白い肌や冷たい青灰色の瞳と相まって、酷く寒々しいような気がするからだ。　　気だるげに前髪を払いのける。

遠くでまた、雷が鳴った。

土砂崩れの可能性がある。内心億劫なのを押し隠し、書類を押してやって立ち上がった。

「見回りに行ってくる」

「こんな日にでございますか」

初老の執事が怪訝そうに問い返した。彼は領地を持たない下級騎士で10年ほど前から我が家に仕えている。

「こんな日だからだ。街道の様子が気になる。ノーリス、父上はまだ留守か」

「はい。騎士館の方での打ち合わせが長引くかもしれないと先ほど伝言がありました」

「そうか」

また面倒でもあったのだろうか。父は領主とはいってもこの土地では新参者に過ぎない。いろいろと複雑なのだろうと眉をしかめた。

「外は寒うございます。今外套をお持ちいたしましょう」

中だつて寒い。レイディアスは一人ごちた。

我が家であるこの領主館は、辺境の小さな荘園に相応しく貧しくつましい。暖炉の薪を節約しているのに、形だけは大きく、修理も行き届いていないためこの時期は酷く冷えるのだ。

外套の中に腰まである髪を突っ込んで玄関へ向かうと、ちょうどそこへ少年が飛び込んできた。年の頃12、3歳の、亜麻色の髪

にはしばみ色の瞳をした少年だ。全身をしとどに濡らし、息を切らしている。

「どうした、ミリアス」

「大変です、すぐ来てください。死体が・・・」

死体。物騒な言葉に緊張が走った。執事と顔を見合わせる。

「落ち着いて話せ。何があつたんだ」

「と、父さんが、街道で、埋まつてる人達を見つけたんです。崖が崩れたみたいで、生きてるのか良くわからなくて・・・何人かは死体みたいなんですけど・・・」

やはり、崩れたか。遅きに失したことにレイディアスは唇を噛む。

「それで、イエルノーは今何処に」

「父さんは、その人たちを掘り出してます」

「わかった、すぐに行く。ノーリス、手の空いた使用人たちを集めてくれ」

助かってくれればいいが。悪魔のような雨雲を睨み、もう何度目か分からないため息をついた。

プロローグ2（前書き）

分けたけど・・・一つにまとめても良かったような気がします。

プロローグ2

ミリアスの案内のもとたどり着いた現場には、すでに5人が掘り出され、横たえられていた。

率いてきた使用人たちにまだ人がいないか探すように命じると、一見して生命のないことが分かる彼らに近寄る。彼らは、金のかかった服装をしていた。取り立てて豪華ではないが、質のよい生地や装備品は、このあたりを良く通る行商人や普通の旅人のもものでは有り得ない。いやな予感がする。

レイディアスは遺体をもつとよく見ようと屈み込む。男が4人、女が一人。いずれもまだ若いように見える。

男のうち二人は、双子だろうか、ほとんど同じ顔をしていた。20代の後半か30代のはじめほどで、黒い髪に、豊かな体躯。ただ服の色だけが違う。腰には真っ直ぐな諸刃の剣を帯びている。刃を抜き出すと、厚く重いのがわかった。根元に天秤の模様が入っている。騎士だ。それもおそらくこのあたりの出身。

女は少女といえるような年齢だった。金の巻き毛に愛らしい造作をしているが、そのみどりの瞳は、見開かれたままうつろに空を見上げている。彼は死体など見慣れていた。今の世にあつてはそう珍しいものではない。それでも痛ましいと思った。そつと目を閉じてやる。隣に横たえられた青年の顔に視線をやり、息を飲んだ。

咄嗟に周囲を見渡し、誰もこちらに注目していないのを確かめる。まさか。何てことだ。レイディアスはわきあがる混乱と恐怖を何とか抑えようとした。見間違えであつてくれと願うが、何度確かめて

も目の前の現実是不変ならない。

蜂蜜色の巻き毛。緑柱石の瞳。精悍で整った顔立ちに鍛え抜かれた瘦躯の20代半ばの青年。

ラグナス。

レイディアスは彼を知っていた。間違えようはずもない、彼は隣の出身だった。かつて机を並べ、屈折した感情を抱いていた相手だ。

にわかには信じがたい、けれどこれは現実なのだ。伯爵家の養子となり、魔王を討伐すべき勇者となったこの青年が、今こんな場所で死体になっている。ということは、共にいた者たちは噂に名高き勇者一行なのだろう。

身の内から寒気が這い上がる。頭から血の気が引いて、地面に片腕をついた。

「大丈夫ですか」

近づいてきたイエルノーが心配そうに問いかけた。

「平気だ。お前は何か気付いたか」

「何かって、仏さんのことですか。どうも、ただの平民には見えませんでしたが・・・」

じろりと睨みつけると、イエルノーは視線をそらしてたじろいだ。

「財布なんて盗んでません。本当です」

「そうか。彼らは商人・・・金貸しと娘とその護衛だったらしい。懐からどっさり証文が出てきた。だが、あまり公言できない客の名があったのだ。だからいいというまで、このことは他言無用だ。息子にもそう伝えておけ」

「そうですか。欲深いまねをするもんじゃありませんね。ろくな死に方をしねえ。わかりやした。黙ってます」

彼は黙っていないだろうな。だからこそ嘘をついたのだ。常日頃は自分の猜疑心にうんざりすることが多かったが、今日ばかりはそれが必要だと確信していた。

背を向けた羊飼いの男になおも鋭いまなざしを向けた後、レイディアスは外套を脱ぐとラグナス等の頭部にかぶせた。

結局その後、生存者は見つからなかった。

男性5名、女性2名。計7名の遺体は、レイディアスが聞き知っていた勇者一行の数とびたりと一致するものだった。

レイディアスは使用人達にも先ほどイエルノーに話したのと同じ嘘をつく、緘口令を敷いて遺体を地下のワイン倉に運びこみ、凍結の魔法をかける。

それから騎士館にいる父のもとにすぐ帰るよう使者を送った。

勇者一行が魔王を倒す前に土砂崩れで全滅するなど笑い話にもな

らない。

だが実際、これは笑い事ではないのだ。魔王が倒されなければ、災害も魔物も収まらない。次に勇者が生まれるまでの十数年か、ひよつとしたら数十年の間、この状況を耐え忍ぶことになる。それ以前に、希望の象徴たる勇者が死んだことが明るみになれば、民は暴動を起こすだろう。

かつてそうして滅んだ国の話を、レイディアスは史書で読んだことがあった。そしてそれは、今まさに我が身に降りかかるうとしているのだ。

老魔導師（前書き）

主人公少年時代。しばらく過去話が続きます。

老魔導師

辺境。リベルを一言で言えばそれに尽きる。

うつそうと茂る森とはるかな山並み。そこにへばりつくようにして広がる丈夫さ一点張りの人家と畑。時折冷たくしけた海風が吹く。もしも天気がよければ、陰鬱な北の海を見ることができたかもしれないが、今日が曇りである事をさして残念には思わなかった。

エルニス＝リーレンボワ・ファン・ファーフナウが姪から手紙を受け取ったのは、もう半月ほど前になる。その時彼はちょうど、長年仕えたイリューシン公爵家所有の魔導騎士団から引退したばかりだった。彼はのんびりした余生を過ごすつもりでいた。そこへ、侍女として仕えている少年に魔法を教えて欲しいという嘆願が来たのだ。当初エルニスはその願いを聞くつもりはなかった。

しかし、朋友にして主君であるイリューシン公にそのことを漏らすと、是非にも行ってくれと頼まれた。

聞けば、その少年の母親はイリューシン公の上の姫なのだという。彼女は表向き、盗賊に襲われてもうずいぶん昔に死んだと思われるが、実は駆け落ちして田舎騎士との間に子を儲けた。それが件の少年だ。

そのような事情を聞けば、エルニスは断れるはずはない。老骨に鞭打って、こうしてこの辺境の莊園までやってきたのだ。が、彼はすでに後悔しかけていた。

イリユースン領より少しは南だから、過ごしやすいのではないかという期待もあった。しかし、その分標高が高ければやはり寒いのだ。その上海風が骨身に染みる。予想以上に田舎でもあった。

暗澹としながら領主館の裏手にある森へ踏み込む。そこが新しい生徒との面会場所だった。

少年の父、リベルの荘園領主である駆け落ち者は名をオルグラム・イルアス・ファン・オリアンという。もとはここから東に領地を持つレイズ子爵に仕える家の出だというのが、駆け落ちの末この辺境の地の荘園におさまった。

姪に言わせれば、彼は大の魔法嫌いだ。ついでに言えば、上級貴族、とくにイリユースンの関係者が嫌いだという。

イリユースンが嫌いなのはよく理解できる。駆け落ちした妻の実家だ。今は公爵に黙認されているとはいえ避けたくもなるだろう。だが、かれの貴族嫌い、魔法嫌い、ただ嫌い、というより盲目的に恐れていると言った方が正しいようだった。

オルグラムは、息子を奪われるのではないかと恐怖していた。

それは、彼の駆け落ち相手に起因する。

世界にはもともと天も地も光も闇もなく、ただ混沌が広がっていたという。そこに理と混沌を司る女神が降り立ち、秩序を与えた。

混沌を材料に私たちの住む世界を作ったのだ。だからこの世のすべては混沌に与えられたかりそめの姿。万物は、死ぬとその魂が混沌の海に還る。そしてそこですべての記憶や執着が解けると、再び練り直され新しい魂となる。新しい魂は混沌の海のある光の道を通ってこの世界に新しく生まれ出でるのだ。

しかし、極まれに魂の中心に形を成しきらなかった「混沌のかけら」を抱いたまま生まれてくる者がある。そうしたものは「混沌のかけら」が混沌の海に還ろうとするのに引きずられ、惹きつけられる。彼らは生きていながら混沌の海が広がる深淵の声を聞き、覗き見ることさえ可能なのだそうだ。

混沌の海はあらゆる物の始まりであり終わり。すべてを支配する女神の領域。そこには、大きな知恵が眠っている。そのため混沌の海を見、声を聞くものは預言を行う聖職者として『深淵をのぞむ者』と呼ばれる。

しかし、深淵は死者の還るところ。本来生者が関わってよいものではない。『深淵をのぞむ者』は、混沌の海で智を得るたびに、代わりにこの世の記憶を失っていく。そしてまた、長く混沌に触れるほどにその魂は混沌に溶けていき、だんだんと正気を失い、最後には魂だけが先に輪廻の輪に還り抜け殻となってしまう。そのため、『深淵をのぞむ者』は生きながら半分死者であるといわれる。

彼の妻クロージャはその『深淵をのぞむ者』だった。魔法にも非常に秀でていたが、『深淵をのぞむ者』の残酷な運命そのままに正気を失い、つい半年ほど前に亡くなったのだという。

そのせいで、彼は残された家族を失うことに非常に敏感になっていた。息子が母譲りの容貌と共に強い魔力を持ち、混沌の欠片を抱いて生まれきたことが、彼を余計に追い詰めた。そもそも魔法と混沌は関わりが深い。

オルグラムにとって、魔法とそれに連なるものは喪失の象徴なのだ。息子が死んだ妻に似た行動をとるたびに、彼は異常な剣幕でそれを止める。

今までは姪がその目を盗んで魔法を教えていたが、彼の魔力は大きく、彼女ではもう手に負えないのだと言う。それで、こうして森の中でこっそり魔導の授業を行うことになったのだ。だが、実際のところ、彼女が期待していたのは魔法の伝授よりも先に、もっと根本的な指導だった。

辺境の少年（前書き）

主人公登場。

でも視点がありません。

辺境の少年

その少年に対する第一印象は、酷く場違いであるというものであった。一見、背景には合っている。緑の深い森に、妖精のように幻想的な風情。しかし、やはり彼、レイディアスは浮いていた。

レイディアス＝リシエリア・ファン・オリアン。まず名前である。いったい何を思っただけで両親はこの名を選んだのか、少年は捨てたはずの母親の実家の伝統にのっとった名を名乗っていた。美しく、格式のある名だ。しかし、荒々しいこの地の騎士たちの中ではそぐわぬ名でもあった。

容貌もそうだ。母譲り、とは聞いていたが、本当に公爵邸にある肖像画にそっくりな、イリュージョンの顔だ。現公爵と同じ青灰色の目をしている。華奢で線の細い少年は、立ち居振る舞いも優雅だった。

王宮から馬車でさらわれてここに放り出されたのだと言われれば、納得できるだろう。しかし少年はこの地で生まれ、この地で育ったのだ。なのに、これほどの周囲と乖離しているのは不自然で、どこか不健康な印象を持たせた。

やれやれ、これではオルグラム卿が母親の面影に振り回されるのも無理はない。内心苦笑しながらレイディアスに歩み寄る。

「はじめまして。姪っ子から話は聞いておるだろうが、これからお前さんの魔導を指導することになるエルニス・ファーフナウド。よろしくたのむぞ」

レイディアスには彼が騎士階級であることは伏せることになっていた。レイディアス本人はイリュージンに対して敵意を持っているようではなかったが、今更縁の切れた母方の名を出して、いたずらに彼を惑わすことは避けたかったからだ。しかし、少年を見るにつけ、そのような配慮に意味があるのかと疑問に思う。

レイディアスにはこりと微笑むと、流れるように礼をした。

「レイディアス」リシエリア・ファン・オリアンです。非才の身ですがご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします」

レイディアスの年は9歳だと聞いていた。淀みのない完璧な宮廷言葉の耳にし、感嘆よりも先に違和感を覚える。

「事情は大まかにではあるが聞いておる。いろいろと複雑そうだが、何でも相談すると良い」

そう言いながら、エルニスはこの先の隠居生活が決して簡単にはいかないことを予感していた。

「まず、早速だがお前さんの实力を見せてもらえんかな。姪っ子にはどの程度習っているんだね」

彼女から聞いてはいたが、本人の口から確認を求める。

「ごく初歩です。蠟燭に火をともしとか、水をお湯に変える程度の暴走させて、父に知れては困るので、あまり大きな術は練習できませんでした。後は制御のための剣舞を少し。これは母に習いました」

「剣舞か・・・それを今見せてもらえるかね」

レイディアスは頷くと、持っていた布包みを解き、片刃の剣を取り出した。

エルニスのような魔導騎士と、魔力に頼らぬオルグラム等普通の騎士では用いる剣からして違う。騎士達は力強い攻撃を重視して、重く真っ直ぐな諸刃の剣を好む。対して魔導騎士の多くは、切れ味を重視した軽く、片刃の少し先端が反った剣を扱う。

この違いは戦い方に由来する。魔導騎士は、剣と同時に魔法を扱う。指で宙に印を切るのに、どうしても片手を空けておかなければならない。そのためには、剣は少しでも軽いほうが良いのだ。また、彼らは気合を入れて全力で剣を振り下ろすことがあまりない。これは呪文を唱えながら戦うため、呼吸を乱すことを嫌うためだ。

対して通常の騎士は、剣しか攻撃に頼るものがないため、そこにより高い破壊力を求める。また、魔法を使って盾を作るわけにも行かないので、防御も高い割合で剣に依存する。そのためには、多少のことでは折れない強度を必要とする。剣技もそれに相応しく、切るより突く、殴るという形が多い。

魔導騎士は、騎士を力しか能がないとけなしているが、普通の騎士達は、そのようなやり方を懦弱だと批判していて、両者は対抗意識を燃やしていた。

レイディアスは、魔導騎士の片刃の剣を正眼に構えると、澄んだ声で歌いだした。理と混沌の女神への賛歌。次いでその子供である戦の守護神への祈りが森に溶ける。肩口で切り揃えられた銀桃色の

髪がさらりと揺れ、歌に合わせて緩やかに振るわれる刀身が次第に淡く輝きだした。魔力を帯びている証だ。

剣舞はもともと、女性の為の舞だ。300年前の剣聖ヴァルラーが、当時の厳格な慣習の前に、剣を習うことを許されなかった娘のため、舞いとして魔導騎士の剣術を伝えたことが始まりとされる。自らの歌を拍子として剣舞を舞い、激しく動きながら呼吸を乱さぬこと、舞に寄せて基本的な型を覚えること、自らの魔力を歌と剣に乗せて安定的に開放するすべを身に着けることを目的とする。男の魔導騎士達は、儀式用の祝祭舞を除いてわざわざ舞の形で覚えることは無いが、今レイディアスが舞っているのはそれではなく巫女の舞だった。クローディアは何か我が子に魔力の制御を覚えさせようとこの方法を取ったのだろうか。

レイディアスはこれが女性の型だと知っているのだろうか。

奇異ではないし、美しいが、男の子が舞っていることに不思議な気分になりつつ見入る。

突き、払い、薙ぐ。蜻蛉を切り、すいと背筋を伸ばす。

レイディアスの舞いは次第に早くなり、それに伴って刀身の輝きも増す。いい動きだ。それに魔力もとても強い。姪っ子が手を焼くわけだと思った。しかし、気になる点があった。左手の動きが鈍い。時折かばうような動作をする。

エルニスは剣舞を終え、息を整える少年に声をかけた。

あざ（前書き）

主人公、いじめられっ子属性です。
短いですがエルニス視点はここで一区切りなので。

あざ

「レイディアス、左腕を少し見せてくれるかな」

瞬間、少年の顔がびくりとこわばった。わずかに腕を後ろに引こうとする。エルニスはその手を半ば無理矢理取ると、白いブラウスの袖をまくった。

そこには明らかに殴られたと分かる大きなあざがあった。

「この傷は？」

「転んだのです。この前舞の稽古をしていて、木にぶつかりました」
レイディアスは睨みつけるように言った。

「違うな。転んだんじゃないだろう。誰にやられた」

「どうだっていいでしょう。ただの・・・ただの子供の喧嘩です。先生も経験があるのでは？」

視線を逸らし、弱弱しく反論する。

エルニスは嘆息した。

「父上か」

「違います！これはただ騎士館に来ていた子息達が難癖をつけてきただけです」

激しく否定して、あつ、と声を詰まらせる。こちらを伺う顔つきに、落ち着いた顔をしていてもまだ子供だなと微笑ましく思った。だが、レイディアスの口ぶりから察するに、これは笑っているだけではすまないだろう。

「子息達が、ね。お前さんの味方はいたのかい」

少年はぐつと言葉に詰まる。無理も無いことだ。内心そう思った。悪い子には見えないが、周囲から浮きすぎている。子供とは残酷で、自分たちとは違うものを容赦なく排斥する生き物だ。

「やれやれ、それは喧嘩じゃなくていじめだよ。まあ、無抵抗というわけは無いんだろうが」

少年は再び目を逸らした。その態度にエルニスはいぶかしむ。

「まさか、一方的にやられていたのか」

レイディアスは詰問に黙り込んだが、やがて観念したように重い口を開いた。

「……………私は喧嘩に弱いのです。剣もほとんど使えなくて、態度も……周囲から浮いていますから」

「まさか。あれだけ剣舞が舞えて剣が使えないということはあるまいに」

レイディアスの剣舞は女性用の優雅さを追及したために多少様式化されているが、十分剣技の型を踏まえている。それを息も乱さずあ

れだけの速さで舞ったのだから、この年の少年としては十分すぎるほどだろう。疑問をあらわにしたエルニスに、少年は9歳らしからぬ苦い笑みを浮かべた。

「剣術の授業を、私はさぼってばかりなのです。だから自業自得なのですが……。父が魔法を切っていることはご存知ですね。父は剣舞も嫌いです。以前私と母が、自分の声ではなく、深淵の歌声

混沌の海の彼方から聞こえてくる自然の調べに合わせて舞っていたのを父に知られたのです。父は私が母のようになるのを恐れていますから。以来舞うなど、禁じられています。

剣の稽古は、大抵父が付けてくれようとするんですが、とつさの動きは癖が出るでしょう。打ちかかってこられたら、私が舞をやめていないとばれてしまいます。だから、剣なんて嫌いだと逃げているんです。騎士にあるまじきことですね。私もいずれは領地を守り、戦場に赴かなければならない身だと分かっているのですが。喧嘩もだから、やり方がわからないんです」

姪がただの魔導師ではなく自分と呼んだのは、このあたりを危惧していることに違いない。

もつときちんと話してくれたらよかったのにと、エルニスは頭を抱えなくなった。この分では、まだまだ他に問題がありそうだ。

イリユーシン公にも頼まれている以上、ここは腰を据えてかかることにした。

「お前さんの生活の事を、出来る限り話してくれませんか？」

父と母

レイディアスは乳と母の間に挟まれて 正確には、駆け落ちした母の実家から来た侍女と、父と父に付けられた乳母の間に挟まれて育った。

母は上位の貴族だったらしい。物心ついたころにはもう母は半ば正気を失っていて、詳しい話を聞くことは出来なかった。だが、実家から追ってきたという侍女ソニアは、母の本名はクローディア・リシエル・ファン・オリアン・デイ・ヴィスハイツであり、イリユーシン公爵ヴィスハイツ家の姫であった事を事あることに口にした。

デイ・ヴィスハイツというのは、ヴィスハイツ家出身のという意味だ。原則として女は嫁ぎ先の家の名を名乗るが、実家のほうが夫の家より家格が上である場合、苗字の後ろにそのように付け加える。生まれてきた子供に対しても、妻の実家が許可すれば、親族に対する保護の証としてデイ・何々家と名乗る事を許される。もっとも、これは駆け落ちの末の子であるレイディアスには関係の無いことだ。

リベルの荘園からあまり離れることの無いレイディアスには、公爵というものの具体的な想像はつきにくい。でも、母やソニアの振る舞いを見ると、それが父の属する場所とはまったく違うことは分かった。本来であれば、その後継者であるレイディアスとも違う世界であつたに違いない。

だがソニアは、レイディアスに主君たる姫君の息子として行動する事を求めた。立ち居振る舞い、言葉遣い、文章の綴り方から時候の挨拶まで「実家流」を貫いた。幼いころのレイディアスには自分のなされている教育の特異性など分からなかったが、気付いたときにはすでにそのようになっていたのだ。

父は、彼に己と同じ騎士としての生き方を求め、母の生き方や文化を極力排除しようとした。書を紐解くより剣を振るって馬を駆り、同世代の少年たちと多少乱暴な遊びやいたずらに興じる。朴訥だが頑健。不器用でも誠実で真っ直ぐ。勇者に憧れ戦場を志す、質実剛健な西部の騎士となる事を強いようとした。

しかし、すでに母方の教育に染まりかけていたレイディアスが、地域の騎士社会のやり方に馴染めるはずもなかった。魔法の才や勉強への好奇心といった生来の気質がそれに拍車をかけ、彼は実家流の生き方に傾倒し、邸に引きこもるようになっていった。

父は当然それを咎めた。剣舞を禁じ、書物を取り上げ、殊更に隣接する領地の騎士館に連れて行つては、同世代の騎士の子達と交流するように促す。

閉じ籠る息子に対する親の望みとしては、当然であったといえるだろう。

しかし、やり方は間違っていた。

強制されれば反抗するのが子供の常だ。

レイディアスもまたそうだった。

レイディアスは別に父を嫌いなわけではない。残されたたった一人の肉親だ。腹の立つことは多いが愛していると思う。

だが、あらゆるものがすれ違っていた。

彼は勉強が好きだった。特に歴史は面白い。だが父は、国史を覗き込むたびに「妻の実家の話など読むな。お前はイリュージンではないのだぞ」と本を取り上げた。騎士に必要なのは勉強よりも剣だと怒鳴った。

剣舞ひとつ取ってみてもそうだ。レイディアスは乱暴で粗野な騎士の子息達が苦手だったが、剣は好きだ。父を喜ばせたかったし、本当はきちんと剣を覚えて少年たちの輪の中に入りたかった。ただ、魔力を制御するための訓練であり、母の思い出のよすがでもある剣舞をあきらめる気にもなれなかった。

彼は孤独だった。

だが、生来の誇り高さはそのことを認めさせまいとした。代わりに彼は見の内にある怒りをかきたてることを選んだ。そしてそれは難しいことではなかった。ただ、身のうちにある不満に名を付けてやればよいだけの話だ。

騎士の子息達なんて教養も無く、粗野で乱暴なだけだ。関わりあ

うなどこちらのほうが願ひ下げだ。父にしても、その粗野な騎士達の一員で、息子に己のやり方を強要しているだけなのだ……。

特に父に対して、レイディアスの不満には根深いものがあつた。

彼の目には、母の面影を排除しようとする父のやり方は、母のことを忘れようとしているようにしか見えなかった。

レイディアスは父と同じように母を愛していた。一日の半ば、心をつつろにさ迷わせるかと思えば、氣勢を上げて錯乱することもあつたが、ほんの時たま正気なとき、やさしく歌ったり、剣舞を教えたりくれたりした。遠い記憶の中に、物語を読み、抱いて寝かしつけてくれた記憶も残っている。レイディアスにとって、貴族的な立ち居振る舞いや言葉遣いは、母の面影を追うことでもあつた。

だからそれを頭から否定する父は、酷く残酷に映る。

しかしいくら悪意を抱いてみたところで、結局のところ、彼は孤独や不満を周囲への怒りや軽蔑にすりかえて身を守ろうとしている己の心を自覚していた。

はけ口の無い鬱積は彼の心を蝕み、そんな時は、馬を駆つて一日中でも森の中を走るのが常だつた。

ソニアの叔父である老魔導師は、まるで学者のような印象を抱かせた。白髪交じりの黒髪に、穏やかなすみれ色の瞳をしている。彼は、その人畜無害な物腰にもかかわらず、人目でレイディアスの怪

我を見破ると、その上あつというまに人の懷に入り込んでしまった。

エルニスは、とても不思議な人だ。いままでソニアにも乳母のメイナアンナにも話さなかったような心情を、あつという間に引き出して見せた。

それは彼が、まったくの部外者であつたせいもあるかもしれない。それでも、彼に対しては初対面だというのに、不思議と疑いを抱く気持ちにならなかった。自分が何を言ってもエルニスは受け止めてくれるような気がしたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0109ba/>

そして勇者は死んだ～名も無き者達の魔王退治～

2011年12月31日20時48分発行